

## 救われるためには罪の自覚が必要である

ヨハネ福音書4:13-19  
【新改訳2017】

- 4:13 イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渴きます。」  
4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」  
4:15 彼女はイエスに言った。「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」  
4:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」  
4:17 彼女は答えた。「私には夫がいません。」イエスは言われた。「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。」  
4:18 あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」  
4:19 彼女は言った。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。」

### 【祈りながら考えよう】

- (1) なぜ主イエスは「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言ったのですか。
- (2) サマリヤの女が「私には夫がいません」との答えは正直な答えですか。
- (3) 「主よ。あなたは預言者だとお見受けします」とは、どういう意味ですか。

### 【解説】

#### (1) その水を私に下さい

《私が渴くことがなく、もうここまできみに来なくてもよいように、その水を私に下さい》(13-15節)  
主が「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」と言われると、女は「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい」と言った。

ここで彼女が言っている言葉は、どのようにも取れる言い方である。

「そんなに便利な水があるものなら、どうぞそれを私に下さい」と皮肉交じりに言っているとも取れるし、また、「今まで嫌な思いをしながら、他の人と顔を合わせる時間を避けて、水を汲みに来ていたのに、もしもそんな便利な水があるなら、どうぞそれを私に下さい」と懇願しているとも取れる。

しかし、彼女の言いたかったことがどのようなことであつたにしろ、彼女の心の中には、「主イエスに対する求め」が出て来たことは事実である。

私たちの神に対する求めの第一歩は、何であるかは本人にもよく分からないながらも、「神に対して心が開かれる」ということである。

おそらく彼女の頭には、「水」のことがあつたであろうが、彼女の心の奥深いところで、「永遠のいのちへの求め」があつたに相違ない。

主イエス・キリストというお方に私たちが最初に出会う時、何かよく自分でも分からないながらも、この方には何かがある、自分が求めている本当のものがあるにちがいないという直感的な思いが湧いてくる。

そして、それが信頼へとつながっていくわけであるが、それに至る前に、もう1つははっきりさせておかなければならないことがある。主は、そのことを次のように、このサマリヤの女に言われた。

#### (2) 救われるためには自分が罪人であると認めなければならない

《イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」》(16節)

なぜ主イエス・キリストは彼女にこのようなことを言われたのか。それは、この主の御言葉に続く、サマリヤの女と主との会話の中に見ることができる。

《彼女は答えた。「私には夫がいません。」

イエスは言われた。「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」(17節)

神である主イエス・キリストは、彼女には正式の夫がないことをご存知であった。彼女のこれまでの罪深い生き方をすべて知っておられた。そこで、それが自分で分かるように、主は一步一步彼女を導こうとされた。

彼女が救われるためには、まず自分が罪人であると認めなければならなかった。心から悔い改め、自分の罪責と恥を告白して、キリストのもとに来なければならなかった。

永遠のいのちを自分のものとして頂くためには、自分の霊的病を知る必要がある。人は自分の病に気づかない限り、医者が必要を認めない。

人をキリストに導こうとするなら、罪の問題を避けてはならない。自分が罪の中に死んでいる者であること、救いが必要であること、自分には自分を救う力がないこと、イエスこそが自分に必要な救い主であること、罪を悔い改め、主に信頼を置けば主が救ってくださる、という事実を受け入れられるようにしなければならない。

この時点以後、「生ける水」については全くふれられない。比喩的言い回しは完全に影をひそめる。主イエスのことばは、直接的、個人的、包み隠さないものとなる。女はついに「生ける水」を求めた。するとすぐ、イエスはそれを与える段階へと進まれる。

主イエスがサマリヤの女に与えられた生ける水の最初一杯は、「罪の自覚」であつたことに注意しよう。この点は、罪があるのにそれを知らず、気にも留めない人々を導こうとする者すべてに対する教訓である。

#### (3) 告白を暖かく受け止められる主イエス

「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」という主イエスの御言葉に対して、彼女は、嘘はつかないで、真実を隠そうとして、言った。「私には夫がいません」。

この返答は、正直で真実な告白である。しかし、そこには、夫でない男と罪深い生活をしている、という忌まわしい事実を隠す目的があつた。

神である主イエスはこの一切をご存知であつた。ここで、主イエス・キリストのお答えは注目に値する。

主は、彼女に言われた。

《「自分には夫がない、と言ったのは、そのとおりです。あなたには夫が五人いましたが、今一緒にいるのは夫ではないのですから。あなたは本当のことを言いました。」》(18節)

彼女の告白に対して、主はそれを暖かく受け止めておられる。彼女に対して、なぜそんなに男を変えたのかとか、そのような同棲生活は正しくないと言うこともできたであろう。しかし、主はそのように非難する言葉を吐かれることなく、むしろ愛と善意をもって受け止めておられる。

この節の後半から明白なのは、この女がモーセの十戒の第七戒(姦淫してはならない)を破っていたことである。これは重要な点である。彼女は罪人であつた。それを認めるまでは、主は生ける水を与えることはできなかった。

主は、彼女の罪をいかにげんにはしておられない。「今一緒にいるのは夫ではないのですから」と言って、今彼女が聖い生活を送っているのではないことをご存知であつたことをはっきりと言われた。

しかし、事実は認めておられるが、叱責はしておられない。「あなたは本当のことを言いました」と言って、彼女の告白をやさしく受け止めておられる。

#### (4) 主イエスを預言者と認識する

《彼女は言った。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします。」》(19節)

私たちが人に接する仕方と、いかに違うことか。たとえば親が子供に対する場合、子供が自分の過ちを認めている時でも、正直に答えたことに対して、それを受け止めるよりも、したこと自体を咎め、怒ったりしてしまう。

そのようにすれば、もう2度と正直に自分の間違いを認めることはせず、むしろ怒られないために嘘をつくようになる。子供が嘘をつく場合の多くは、このようにして起こる。これは、何も子供に対する場合だけでなく、他の人に対する場合にも、よく私たちがしてしまうこと。しかし、主は暖かく受け止めてくださる。

主イエスは、今日も私たちを同じようにあしらってください。私たちは自分の本当の姿が分かつたであろうか。もしも分かつたら、「主イエスは、私たちを汚れたまま救ってくださる救い主である」ことを知ってほしい。

自分の人生が目前でこのように明るみに出された時、女は自分に話しかけている人が「ただ者」ではないことに気がついた。「主よ。あなたは預言者だとお見受けします」と告白している。

ここで彼女が預言者と言っているのは、「救い主」(メシア)という意味である。というのは、サマリヤ人は「モーセの五書」しか持っていなかったから、彼女がここで預言者と言っているのは、申命記18章18節で、主がモーセのような「ひとりの預言者を起こそう」と言われた「あの預言者」のことであることは明白である。

